岡田街並み探索講座　　2014.7.31

江戸から昭和にかけての「知多木綿」

７月３１日知多の岡田へ出かけた。知多木綿の江戸から昭和にかけての歴史について、日本福祉大学の「曲田宏和氏」の講義を聴いた。会場は岡田奥組会所で隣には山車蔵もある、畳敷きの広い会場は網戸を通してさわやかな風が感じられる。でも、40 人ほどの人が入ると扇風機のみで、エアコンのない部屋は段々暑くなってきた。講義のあと近くにある「オカトク織布」の工場見学をしたが、ここも暑かった。しかし、最近の織布工場を見たことはなくとても勉強になった。いただいた資料とお話の中でなるほどと思った事柄を整理しました。

1　16 世紀後半の知多木綿

はじめに木綿はいつころから発達したのか、昔は麻を栽培して布を作っていた。が、麻は作るのが難しくて、１年かかるなどかなり手間のかかるものだった。それに比べると木綿は栽培も容易で半年でできることから、段々と増えていった。

〔表2-①〕知多木綿買次問屋一覧表

	木綿買次問屋		記録上の初見	開業年代	江戸所属	備考
①	浜島伝右衛門	大野	宝永2(1705)	元文	大伝馬町	元くり綿商―江戸問屋―慶応譲渡
②	中島七右衛門	岡田	宝暦12(1762)	享保	大伝馬町	嘉永4年休職
③	竹之内源助	岡田	文化4(1807)	享保	白子	文化4年⑦へ譲渡 天保再興
④	両口屋弥四郎	横須賀	天保以前?	延享以前	大伝馬町	天保2年⑧へ譲渡
⑤	橋本屋伊左衛門	有松	宝暦3(1753)	宝暦以前	白子	天明4年休職、天保7年③へ貸与
⑥	西村助左衛門	西之口	延享2(1745)	延享	大伝馬町	元くり綿商―天保14廃業年
⑦	村瀬彦助	横須賀	文化4(1807)	文化	白子	
⑧	杉山利兵衛	大野	天保2(1831)	天保	大伝馬町	元くり綿商

森原章「知多木綿買次問屋の存在形態」（『東海地方史の展開』所収）の表を一部修正して作成

『知多市誌』（本文編）

天正 3 年(1575)長篠の戦いで鉄砲が大量に使用されたが、この鉄砲の火縄に使われたのが木綿である。木綿ができて戦国時代の戦いは大きく変わったのだ。16 世紀後半になると木綿の需要が拡大して行った、「農業家訓記(享保 15 年・1730)」や阿久比蓮慶寺に残る蔵書などから推察することができる。この地域では佐布里が綿花の産地であった、明治以降は少なくなったが岡田へも広まった。17 世紀の元禄時代になると木綿は一般に普及する、その大きな市場が江戸であり、荷を集めるため木綿問屋が生まれる。(左の表)

2　江戸時代の知多木綿は品質が劣る

知多から江戸へ木綿を出荷するために、荷は大野から船で伊勢の白子(鈴鹿市)へ送られ、ここから大きな船に積み替え廻船で江戸へ運んだ。江戸の問屋には白子組と大伝馬町組があって、岡田では竹之内源助家は白子組、中島七右衛門家は大伝馬町組に納めた。このため、岡田は荷の集荷地であった。当時は牛や馬で運搬したので、郷中の石垣には牛や馬をとめた金具が今も残され、往時をしのぶことができる。しかし、18 世紀中ごろの知多木綿は品質が劣っていた。「知多郡木綿は下品にて外の木綿とは競い難く、値段も下直に御座候」と言われた。その後、中島七右衛門が松阪でさらし製法を伝習し、品質の向上が見

られた。それでもまだまだ品質は劣るもので、レベルアップしたもののこれまで品質 8 番～10 番だったものが、4 番～6 番で名古屋や三河の 2 番・3 番には及ばなかった。(下の表・銘柄と等級を示す)

表3

天保4年 田中七郎右衛門 名古屋 伊勢 伊賀 伊予 ※三重県史(資料編 近世4(上))

地域	商人	二番	三番	四番	五番	六番	七番	八番	九番	十番
名古屋	平野喜兵衛	綾織	糸錦	鈴虫	大淀	乙姫	竜田	八島	九重	千代緑
	磯貝忠左衛門	高麗	春草	福寿	小車	若水	七草	初霞	松花	浜風
	浜島永太郎	玉綾	三輪	卯花	石山	若紫	玉柏	松島	早船	宝船
	菱屋喜兵衛	滝竜	滝川	薄雲	志賀	松山	花車			
三河	深谷半左衛門	極柳	富桜	花園	吉野	錦桜				
	深見佐兵衛	青柳	真砂	紅桜	柏崎	松緑				
	外山善兵衛	家柳	錦鶏	京桜	豊島	緑葉				
	野村伴右衛門	留葛	今泉	桃園	嬉野	玉柳				
(知多)	(浜島伝右衛門)			春織	谷桜	桂山				
	(中島七右衛門)			花緑	新織	柳織				

3　幕末から明治にかけての知多白木綿

幕末期の知多白木綿市場は大きく成長した、天保初年(1838 頃)約 20 万反だったものが、嘉永期(1850 年頃)には約 40～50 万反になった。これは天保の改革で物価上昇を抑えるために、江戸の問屋組合を解散した。これにより自由に売ることができるようになったのだ。併せてこのころ酒を売りだすが、品質が悪くて売れなかった。そのため廃業し、今度は味噌・たまり・みりんを作るようになる。その後、灘の酒が停滞し知多酒のシェアーが 16%伸びた。

明治になると知多綿織物市場は大きく成長する、明治 19 年(1886)約 40 万反だったものが、明治 22 年(1889)には約 200 万反に伸びた。これはガラ紡の盛んだった三河から綿花ではなく綿糸を持ってきたことが大きく影響している。さらに、明治 30 年(1897)には約 1.000 万反になった。この時は晒加工技術がさらに改良され、高級品を作ることができるようになったことが背景にある。

4　晒工場と織布工場の展開

1) 知多半島西浦から東浦への拡大

知多木綿の問屋(卸売商)は知多半島の西浦から東浦へ拡大していく。江戸時代の流通の縛りが亡くなり、東浦側の船の利用が進んだ。加えて、西浦側では輸出がメインの広幅が、東浦側では国内向けがメインの小幅が主流になり、製品の差別化が進んだことによる。そして、手織りから機械織りへ発展し大正 3 年(1914)の知多郡の力織機率は、全国平均が 19.3%の時に何と 99.1%で全国 1 位だった。

2) 岡田の発展状況

明治 42 年(1909)の岡田町の晒工場は 6 軒、職工 97 人で、江戸時代から晒加工の場だった。そして、織布工場は 4 軒、職工は 158 人だった。当時は蒸気や石油をエネルギーとしていた。明治 27 年(1898)24 台から始めた岡徳織布は、昭和 14 年(1939)には織機 2.698 台の規模にまでなっていた。この時岡田村の工業生産額は山形県と同じだったと言う。

昭和 30 年ころまで日長川の晒は岡田を象徴する姿だった、あちこちで木綿をさらす光景が見られたのだ。晒加工技術が知多木綿を全国ブランドに押し上げ、力織機の普及が知多木綿を定着させた。今も知

多 5 市 5 町の工業生産額は国内全県の中で 22 番と言う。この織布工場と蔵の多く残る町岡田は、「織物」「晒」「集荷」の 3 要素があって形作られたと言える。

〔表4〕　表2—213　知多市域の工場　明治42年

種別	名称	所在地	事業主	職工数 男	職工数 女	職工数 計	原動機	創業年月
製糸	早川製糸工場	旭村	早川虎吉	1	12	13	……	明治・28・5
織物	竹内木綿工場	岡田町	竹内虎王	2	22	24	石油発動機	明治34・6
	竹田織布工場	岡田町	竹田文治郎	9	70	79	汽機	明治41・8
	全織布工場	岡田町	竹田三郎治	3	25	28	汽機	明治41・9
	旭工場	旭村	竹内久太郎	2	10	12	石油発動機	明治42・6
	笹根織布工場	岡田町	笹根傳次郎	3	24	27	汽機	明治42・6
	生木綿製造工場	八幡村	*佐織合資会社	0	35	35	ガス発動機	明治42・9
	木綿製造工場	八幡村	*新知製織合資会社	0	41	41	汽機	明治30・12
	生木綿製造工場	八幡村	*早川木綿合資会社	0	29	29	石油発動機	明治41・1
晒	木綿晒工場	八幡村	竹内初次郎	10	0	10	……	明治23・3
	木綿晒工場	八幡村	竹内千代松	10	0	10	……	明治28・5
	羽晒業	岡田町	川内作五郎	13	0	13	……	明治25・10
	命晒業	岡田町	竹内平之右衛門	14	0	14	……	明治27・1
	交晒業	岡田町	竹内文右衛門	13	0	13	……	明治30・7
	夕晒業	岡田町	竹内源次郎	12	0	12	……	明治37・12
	刊晒業	岡田町	竹内重太郎	13	0	13	……	明治29・11
	家晒業	岡田町	加藤初太郎	12	0	12	……	明治22・12
酒造	山口酒造場	八幡村	山口素臣	10	0	10	汽機	文化年間

（注）　*印…商業（販売）機能を兼ねる　「知多郡統計概覧」による

〔表5〕　表2—219(ロ)　昭和14年当時の上位10社

順位	事業所(者)名	町村名	昭和14年台数	昭和2年台数
1	岡徳織布（安藤梅吉）	岡田	2,698台	557台
2	・中七木綿	岡田	1,620	790
3	・山田佐一	乙川	1,276	510
4	都築吉太郎	阿久比	904	96
5	長坂俊太郎	東浦	812	68
6	浅田磯式	岡田	630	156
7	・山田保造	乙川	526	382
8	・雀印織布	横須賀	462	380
9	岡戸嘉七	東浦	416	253
10	・北村木綿	成岩	400	120

（注）・印は問屋を兼営　織機台数は広幅、小幅の合計
「知多織物百年の歩み」による

江戸名所図会にある松阪の長井屋

木綿の梱包単位は昔も今も変わらず、ひとつの包みを「一荷(いっか)」と呼び 100 反である。

(参考 1)　　延歴 18 年の崑崙人(天竺人)の参河国漂着と綿種の伝来

平成 26 年 7 月 26 日西尾市岩瀬文庫研修ホールで開催された、東京大学資料編纂所の田島公氏の講演資料に以下のことが記されている。日本・中国・朝鮮対外交流年表---大宝元年～文治元年、の中に「延歴 18 年参河国に小舟に乗った異国人が来着する。言葉が通じず何国人か不明なため、大唐人に見せたとこ

ろ崑崙人(こんろんじん)という」延歴 19 年には「参河国に流来の崑崙人(こんろんじん)が綿種を紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊予・土佐大宰府等諸国に植えさせ、栽培方法も指示する。後に自ら天竺人と言う。川原寺に住まわせる。」とある。この川原寺は西尾市の憩いの農園近くとか……。

(参考 2)　　棉祖心「天竹神社」　　(天竹神社のパンフレットより抜粋)

日本で唯一棉の神様を御祭神としています。西尾市天竹町にある天竹神社の保存会では神社に伝わる棉の伝統を守り、後世に残す活動を行っています。平成 7 年には住民の要請がかなえられ、駐日インド大使が神社の歴史や保存会の活動などを視察にきました。「棉文化を伝えるのが発祥地の務め」と保存会では、伝来 1.200 年の機を新たに活動を続けています。棉を尊ぶ祭事として古式ゆかしい①くり棉②棉打ち③糸紡ぎ の儀式と、崑崙人が小舟で漂着した故事にのっとり④船みこし が奉納されます。秋の大祭に合わせて毎年 10 月第 4 日曜日に行われます。

※棉と綿の違い…実を収穫して種を取り除いた段階までが「棉」、打ってほぐすと「綿」と区別しています。

崑崙人のことが初めて記されている「日本後記」

小舟が三河に漂着し、言葉は通じなかったが自らは天竺人と言い、棉の実を持っていた。崑崙人は年齢 20 歳前後、身長 5 尺 5 寸、左の肩に袈裟のような布をつけていた。その後の崑崙人は、当地の川原寺に住み綿花の栽培を村人に教えました。勅命により翌年、紀伊、伊予、土佐、及び大宰府など温暖な土地に種をまいたと「類聚国史」の記述にあります。

綿業の発展はこの棉の種にあった

その後これが在来綿の起源となりました。江戸時代の貿易備考から「三河国は棉を以て第一の産物とす。幡豆郡一色村を以て専売市場となし、同郡平坂港の買次を経て江戸に販売す」と繁栄ぶりが分かります。日本の棉作発祥地である三河で紡ぎ、織りあげられた綿製品は安土桃山時代～江戸時代にかけて全国に販路を広げ、明治時代にその最盛期に達しました。

織物の新しい神様「アラハタ神」と呼ばれました

その後崑崙人は僧となり、近江の国分寺に入ったと伝えられています。日本の綿業の繁栄をもたらした崑崙人の徳を深く偲び、棉祖の紙として川原寺から遷された地蔵堂に産土神として奉ってきました。絹の波陀神に対し、新しい棉の神と言うことで新波陀(アラハタ)神と称されました。

(参考 3)　　知多木綿.岡田の歴史

知多木綿の歴史は、江戸時代初期の慶長年間(1596～1615)に江戸送りが始まったと伝えています。初期には生白木綿が農家で織られ、それが伊勢に送られて晒加工された後「伊勢晒」とか「松阪晒」として江戸に送られたと言います。その後、江戸中期の天明年間(1781～1789)に岡田村の中嶋七右衛門らが苦労して晒技術を導入。それ以来「知多晒」としての名声が高まり江戸送り日本一とも言われるようになった。享保年間(1716～1735)になって岡田村の中島七右衛門と竹之内源助が江戸木綿買継問屋株を取得し、知多木綿の販路を全国に広げた。明治 2 年(1869)の人口は 1833 人、戸数は 411 戸。明治 25 年頃から木綿製造は輸入動力織機を取り入れ大量生産の時代に入った。そのころ岡田の竹内虎王は動力織機を発明し、明治 34 年に織物工場を創業しました。大正 8 年には人口 4300 人、31 工場と増加し、町は若い女工さんでにぎわった。

昭和 17 年(1919)戦争の激化に伴い、国策で大半の織物工場が軍需工場に転用させられた。戦後はほぼ

ゼロからの出発になったが、経営者の努力により再び輸出産業の花形として、昭和 30 年代までは活気にあふれていた。近年では、知多、松阪、泉州が日本での三大綿織物生産地と言われ、機械の自動化も著しく、消費者の好みにこたえる高級、高品質の綿布が大量生産されてきました。しかし、その後は周辺国に追い上げられて、他の産地同様に衰退を余儀なくさせられた。最盛期には知多木綿の 7 割が岡田で扱われたことから「知多木綿のふるさと岡田」と呼ばれるようになった。

5　オカトク株式会社の見学

オカトク株式会社は、大正 2 年(1913)にできました。昔、岡田で岡重の徳之助と言う人がいて、その名前から岡徳(オカトク)になったと言われています。幅 1～2m・長さ 100m～2100m までの綿と合繊の布を作っています。

★主な機械　織機　250cm 幅.....5 台　　大径巻機.....15 台　　検反機.....7 台
　　190cm 幅.....17 台　　糊付け機.....1 台　　管巻機....12 台
　　150cm 幅.....55 台　　整経機.....2 台

★生産品目　服飾表地.....シャツ、パンツ、ブラウス、ユニフォームなど
　　服飾裏地.....裏地、ポケット裏、腰裏など
　　服飾芯地.....薄物芯地全般
　　産業資材.....ブックカバー、レザー元布、研磨布など
　　衛星材料.....包帯、スポーツテープなど

工場に着くと若い 30 代の方 ? が案内してくれました。最初は屋外ヤードの綿糸の置き場で、ほとんど横文字の外国製、インド・インドネシアなど。1 箱は 50 ポンド(22Kg)でいろいろの数字が書かれているが、これは糸の太さを表している。数字が大きいほど糸は細いものになる。

いよいよ工場に入り、縦糸をドラムに巻きつける荒巻・糸に糊づけ・縦糸が切れたら感知するための経(へ)通し(縦糸を通すこと、横糸は緯)・織の行程を見学する。最新の織機がずらりと並んで稼働している様は圧巻である。この織機はほとんど「津田駒製」という、理由はいつまでもメンテが可能だからという。しかし、織機と織機の間はかなり狭く、これで糸のセットや完成品の取りだしはできるのか不思議であり質問してみると、それがプロの技術だと言われた。でも、もっと楽に安全に作業できるように改善が必要ではないかと思った。

最後に完成品置き場へ、ここには折りたたんだ製品とロール状に巻いた製品があった。折りたたむとそこに染めむらができ易いので、染めむらになってはいけないものはロールにする。これらの製品はすべて国内向けと言う。仕事量はあるのか聞くと、いろいろ細かなオーダーに対応することでお客さんの信頼を得ている。旨い仕事はなくとも、客のニーズを取り込めば仕事はあるということだった。なるほど細くとも長く続ける商売の極意とうなずけた。とても暑い中での見学だったが、これまで曖昧なことしか知らなかったことが理解できとてもよかった。

★講義と工場見学の様子

岡田奥組会所の会場

岡田奥組山車蔵

綿糸置き場

荒巻

糊づけ行程

へ通し(ドロッパー・かざり・おさに糸を通す)

糸は繰り出しやすくするために台形に巻く

織機の後ろ側(完成品)

織機の前側

製品検査工程

完成品置き場